

# 連絡ニュース

## 連絡ニュース再出発の弁

所 長 村 上 子 郎

前号で予告申し上げたように、本号から装いを新たにしました。従来の形式に長年慣れてきた方がたには淋しい思いをさせたことであろうが、古い形式にとらわれない若い人びとには好感をもつて迎えられたのではなからうか。本紙の刊行に直接携わっている私どもとしてはかねての懸案がひとまず解決し、一安心したというのが偽らざる感懐である。

本連絡ニュースは、これまでも従来のワクのなかでいろいろ新しい工夫が試みられてきたが、まだ十分機が熟さなかつたとみえ、既存のワクを突き破るまでには至らなかつた。しかし、従来のままでは、こんど急激な進展が予想される水産の試験研究に歩調を合わせ、これに関するニュースを手ざわよく速報する本来の使命をはたしてゆくことがむずかしくなる見通しが最近とくに強くなるとともに、この際本紙の体裁を一新し、再出発を図るべきだとの声が強くなってきていた。

一方、わが国でもようやく海洋開発の機が熟し、各分野で具体的な動きが始まつてきたことはすでに承知のとおり。水産の分野でも、もちろん、この機会を捕え一層の躍進を図るべく、着々と準備が進められている。かような時勢に便乗するといつては大げさであるが、水産の再出発が意図されているこの時期は、本紙の刷新を図るにもかつこうの潮時とみてよからう。

内部的にも外部的にも条件がそろつたところで、ちゆ

うちよすることなく本紙の体裁を改めることにした。今回いろいろと新しい試みが企てられたが、そのなかでとくにめだつた点をあげれば、記事を横書きにしたことと「日本海」欄を廃止したことの二つであろう。

元来、自然科学を背景とした記事が縦書きよりは横書きの方が好都合であることはいまさらうんぬんするまでもあるまい。これまで長い間大きな不便を忍びながら縦書きに固執してきたことが、むしろ、ふしぎな位である。本来あるべき姿に変わつただけだといえそれまでであるが、先輩諸子が嘗々として築き上げてきた20年の歴史に大きな転機をもたらした点で、特筆すべきことであらう。

また、「日本海」のような特別な欄を設けると、とくに内容を規定しなくても、知らずしらずのうちにその性格が固定してくる。良い方向に落ち着いてくれれば問題はないが、本紙の場合どちらかといえば堅い内容のものとなつてきた。このため書くにしても読むにしても多少堅苦しくなつてきたことは否めない。むずかしい主義とか主張を発表するのが本紙の趣旨ではないので、この際思い切って本欄の廃止に踏み切つた。水産に関する気楽な読みものとしてこれまで以上多くの読者に親しまれることを期待したい。

本紙の再出発にあたり、従来に劣らぬご愛読とご支援を賜わらば幸いである。

### < お も な 記 事 >

- ◇ 連絡ニュース再出発の弁
- ◇ 開洋丸、総合開発研究のため日本海へ回航
- ◇ 日本海の生態系に関するシンポジウム
- ◇ 浮魚資源加入機構共同調査
- ◇ 日本海区場所長会議
- ◇ クルマエビ種苗放流地を訪ねて
- ◇ 日本海ブロック会議開催
- ◇ 人事異動と組織変更

## 開洋丸 総合開発研究のため日本海へ回航

昭和43年度から始まった特別研究促進調整費による「日本海に関する総合研究」も昭和45年度で一応うち切られることになっている。過去2カ年間の調査経過は、必ずしも当初考えていたようには進んでおらず、成果のある研究にするためのこ入れとして、水産庁および他水研の好意によって開洋丸(2,539トン)を日本海へ回航することになった。

開洋丸は5月27日新潟へ入港、6月30日帰途につく予定で、この間5月30日～6月17日(第1次)、6月20日～6月27日(第2次)の2航海を行なう。調査には、陣野船長以下50名の船員の参加と共に、陸上からは日水研のほか東海・遠洋・西海・南西等の水研および水試から約15名

の調査員が乗船することになっている。

第1次航海(トロール)の調査海域は、北大和堆、大和堆、穩岐海嶺、白山瀬およびその周辺の500～1,200mの間の海域で、トロール漁獲試験、海底地形調査、生物相および生態研究用の資料採集、漁場における海洋調査、甲殻類の鮮度保持のための研究などが計画されている。

第2次航海(海洋観測)は能登半島および山形県加茂のN-NW日本海横断観測線上に25定点を設定し、日本海固有冷水の特性の深度および地域差の検証のために、水温、塩分、溶存酸素、栄養塩類の調査を行なう。これらの精度を向上させるために、観測層の間隔を可能な限り細かく

し、各測定要素の精度を1桁以上高めるようにする。また、測定方法、更生方法、解析方法にも工夫を払うことにしている。

開洋丸には、深海用精密音響測深機、測器着底指示器、STDその他数多くの優秀な計器類が積込まれており、日ごろ小型調査船では接することのできないこれら計器類操作の習熟と、これらを十分活用した調査を行なうことによつて立派な成果をあげ、開洋丸を誘致した目的を十分に果したいと考えている。

また、広い船内と多数の調査員、とくに、生物、海洋、利用、漁労などの各分野の研究者によつて、連繋のとれたきめの細かい調査を行なうことができ、とかくばらばらになりがちなこの種の調査にとつては得がたい好機会を得ることができるものと考えている。(日水研)

## 日本海の生態系に関するシンポジウム

去る3月27日に東京大学海洋研究所において標記のシンポジウムが開催された。これは今夏予定されている同所々属の大聖調査船・白鳳丸(3,200t)の日本海航海(KH-70-4)に関連したシンポジウムであつて、乗船研究者が日本海についての理解を深めるとともに、航海計画を作る際の参考にするというのがその主目的である。

当日の講演内容は次の通り

日本海の場合・植物プランクトン

……大和田守(舞海気)

日本海の動物プランクトン……

鬼頭正隆(気象庁), 根本敬久(東大)

日本海の生物地理……西村三郎(京大)

日本海の深海生物資源……

……沖山宗雄(日水研)

日本海のパントス……堀越増興(東大)

日本海の地学……本座栄一(東大)

これらの講演からも予測されるように、日本海の海洋生物学全般にわたつて話題にのぼつたが、日本海の特異性——とくに深海生物相の量・質両面における貧困——が強調された。これに関連して日本海における生物群集の構成を太平洋におけるそれと詳細に比較し対応させようという試論が注目された。

いずれにしても、日本海の基礎的研究は極めて不十分であつて、今回の白鳳丸航海による海洋バクテリア・生産力・有機懸濁物・動物プランクトン・マイクロネクトンなどの各分野の研究は貴重な情報をもたらしてくれるであろう。なお魚群探知機による魚群の計数の研究も計画されていることを記しておきたい。

(日水研)

## 浮魚資源加入機構共同調査

3月23日に西部6府県および日水研の関係者が参集し、44年度の調査結果の検討会を行ない、その結果、44年度の結果は4月末まで取りまとめることおよび45年度計画を5月の西部ブロック会議で審議し、継続実施することを決定した。(日水研)

## 日本海区場所長会議

日本海ブロック会議に引き続いて25日午後表題の会議が開かれ、日本海の水産研究の問題点と今後の方向についての意見交換が行なわれた。

主な議題は増養殖(種苗放流を含む)・深海漁場開発であつた。その結果、クルマエビ・アワビの種苗放流に関する検討会を日水研主催で、できるだけ早い機会に開催することが決定された。(日水研)

### 日本海ブロック会議開催

3月24日および25日の午前におわつて、新潟県漁民研修所会議室において、昭和44年度日本海ブロック会議が開催された。

水産庁研究一課、全漁連、西海区水研、本州日本海側12府県水試および日水研から60余名の関係者が出席し、45年4～6月における漁海況予報の作成を中心議題にして討議が進められた。まず、予報原案自身の検討に先立って、予報の根拠になっている考え方や最近の情報などについて、話題提供の形で日水研の各担当者が紹介を行ない、それを素材にして検討が加えられ、予報案の審議採択があつた。

さらに、このブロック会議をより一層有意義なものにしたいという意図から提案された「ブロック会議のあり方」について、会議を構成する

近年、日本海沿岸各地でクルマエビの種苗放流事業が盛んに行なわれているようであるが、その効果は？と尋ねると、ある人は効果があるというし、他の人は全く否定的である。だが、これも直接漁業にたずさわっている人達の声ではない。漁業者の方々はどうな意見なのだろうかと思つてしたが、幸い、生の声を聞く機会に恵まれた。私が訪ねたのは新潟県も富山に近い親不知漁業協同組合である。ここで組合員の皆さんからクルマエビ漁業のことや種苗放流のことなど、いろいろとお話をうかがつた。

この組合では、昭和41・42年の2年間、それぞれ25万尾・40万尾の種苗を放流した。昭和41年の種苗は非常に活力が低かつたので、大半は海の藻屑となつてしまつたのではなからうか。次の年の種苗は活力があ

各機関の意見がのべられた。

最後に、この会議とは別の機会に「分科会」のような形で開催済みの各種調査に関する諸会議の結果などが報告され、周知承認された。

採択された予報内容は、すでに「日本海漁海況長期予報、No. 25」として公表されているし、会議議事録も別に印刷中であるので、詳細はそれらにゆずり、ここでは、議題のみの記録にとどめておくことにした。

#### 一、浮魚資源と海況変動の見とおし 話題提供

- (1) 海況予報作成の考え方および問題点……………川合 英夫
- (2) マアジ資源の予測と漁況予報に際しての基礎的知見の整理と考え方……………鈴木 智之
- (3) マサバの回遊パターンの変化と長期予報……………岡地伊佐雄
- (4) ブリ資源の動向および北上期

- における分布・移動……………
- ……………渡辺 和春
- (5) イソシ類資源の動向……………
- ……………渡辺 和春
- (6) 最近得られた日本海のスルメイカに関する知見……………
- ……………伊東 祐方
- 二、昭和45年4～6月における主要魚種の漁況ならびに海況の長期予報案の検討
- 三、今後の日本海ブロック会議のあり方
- 四、諸調査に関する会議報告および事務的打ち合わせ
- (1) 日本海ます調査
- (2) 日本海総合開発調査
- (3) 月別海洋観測定線の一部変更
- (4) 漁海況予報事業
- (5) 沿岸重要・底魚資源委託調査
- (6) スルメイカ共同調査
- (7) 資源の加入機構に関する共同調査 (日水研)

り、昭和43年の漁期には放流水域が好漁場となつた。その水域はかつて好漁場となつたことがなかつたので、少しは効果があつたのかなーと半信半疑、私の受けた感じでは、放流効果については否定的であつた。そして、効果のあることがはつきり

### クルマエビ 種苗放流地を訪ねて

伊 東 弘

わかれば、これからも続けて行くが、今の状態では一という話、親不知からの帰途立寄つた他の組合では、種苗放流について内部討議をした結果、海のものとも山のものともわからないものに金は出せないということで見送ることにしたそうだ。

日本海でクルマエビの種苗放流を

始めてから数年になるが、現行の方法による放流効果については否定的な意見が多いようだ。日本海の特殊性を口にしなが、その言葉とは裏腹に、他の海区で成功しているのだから、日本海でもうまく行くだろうといった考えで放流事業を行なつているところにも一因があるように思えるが、日本海の特殊性を強調されるなら、日本海ではどんな場所に、どんな方法で実施すればよいかを考えた方がよいのではないだろうか。この辺で放流事業を一時中止して七尾湾とか真野湾などを実験漁場にして大規模な実験でもやってみてはいかがなものであろうか。そこである程度の結論を出してから事業にふみ切つても遅くはないと思うが、現在のような状態が続けば一番迷惑するのは漁民なのではないだろうか。

(日水研 技官)

### 人事異動と 組織変更

新年度を迎え、山形・富山両県水試の場長をはじめとして、海区内の各県水試に大幅な人事異動がありましたので特集しました。また、石川県では、水試能登島分場を母体にした独立新機構「石川県増殖試験場」が発足し、鳥取水試では、場内の組織に変更がありました。

**青森県水産試験場** 4月1日付  
命庶務課長  
(北農林事務所) 広瀬 準三  
命淡水課勤務  
(県衛生研究所) 林 義孝  
命漁業課勤務  
(相坂養魚場) 佐藤 直三  
新採用 漁業課 鈴木 史紀  
相坂養魚場 小田切譲二  
命漁業課(調査課) 齋藤 重男  
転出(庶務課長) 工藤弥五右エ門  
(漁業課) 富永 武治  
退職(淡水養殖課) 橋爪 政男

**秋田県水産試験場** 4月1日付  
命場長補佐  
(秋田港務所長補佐) 三浦直之助  
命調査科長  
(漁業監督専門員) 渡辺 一  
命戸賀分場増殖科長  
(調査科長) 藤田 勝夫  
命戸賀分場種苗生産科主任  
(農政部水産課) 三平 雄一  
命戸賀分場増殖科勤務  
(調査科) 佐藤 善雄  
命水産試験場勤務  
(船川水産高校) 北岡 好一  
命千秋丸機関長  
(千秋丸機関部員) 秋山恵喜男  
命戸賀分場種苗生産科勤務  
(戸賀分場) 加藤 淳一

転出(場長補佐) 伊藤 馨  
退職(千秋丸機関長) 明石 多助

**山形県水産試験場** 4月1日付  
命場長  
(水産課々長補佐) 山岡 勇作  
命総務係長  
(庄内支庁税務課) 富樫 英一  
退職(場長) 伊関 栄  
転出(総務係長) 武田 雅男

**新潟県水産試験場** 4月1日付  
命総務課長  
(林業事務所次長) 水野隆太郎  
新採用 技師 中泉 憲  
技師 野村 哲一  
越路丸甲板員 神村 富夫  
転出(総務課長) 小島 達

**富山県水産試験場** 4月1日付  
命場長  
(水産課主査) 小林 幸  
命利用増殖課長  
(漁調委事務局長) 西野 健雄  
退職(場長) 今井 尚信  
転出(利用増殖課長) 土肥誠一郎  
(利用増殖課) 園田 宏

**石川県水産試験場** 4月1日付  
命庶務課勤務  
(輪島土木事務所) 府中美代子  
転出(庶務課) 米田 和子  
(庶務課) 新出 博  
退職(増殖科) 阿部 秀直

**石川県増殖試験場** 4月1日付  
(水試から分離独立)  
命場長兼務  
(水産課長) 屋代 勝敏  
命庶務課長  
(七尾事務所) 岡野与一郎  
命研究課査科長  
(水試増殖科長) 江渡 唯信  
命生産科長  
(水試増殖科) 橋場 末治

命増殖試験場勤務  
(水試増殖科)技師 中谷 栄  
( " ) " 高橋 稔彦  
( " ) " 木尾 洋  
( " ) " 田島 迪生  
(水産課) " 又野 康男  
(水産増殖科)技師補 徳田 進  
( " )技術員 佐賀万志司  
新採用 主事補 橋本 重昭

**鳥取県水産試験場** 4月1日付  
(組織変更)  
命総務課長  
(庶務係長) 池内 直義  
命漁場開発科長  
(生産化学科長) 佐野 茂  
命飼養科長  
(海洋科長) 山崎 廉三  
命海洋資源科長  
(境港分場長) 小田切忠夫  
命境港分場長  
(主任技師) 中野 麟一

[新組織]  
┌──総務課 5名  
├──漁場開発科 5  
│ 第2鳥取丸 4  
├──飼養科 5  
├──海洋資源科 3  
└──境港分場 5  
第1鳥取丸 13

**鳥根県水産試験場** 4月1日付  
新採用 専門研究員 高橋 伊武  
専門研究員 中村 幹雄

**山口県外海水産試験場**  
4月1日付  
新採用 水津 洋志  
命水試兼務  
(水産課主査) 羽倉 伯士  
(専門技術員) 桑原哲太郎  
(下関水産事務所) 広本 正和  
転出(水産増殖科) 西村 忠恭  
**おながい** 今後の人事異動についても、その都度ご連絡下さい。